

夏

もしも一年の巡りのなかに

夏を欠いたなら

秋冬は恨みを残して

暮れてゆくでしょう

熟れた果実が自らの重みによって

その枝先を離れてゆくためには

夏の雨が 風が

あの苛烈な光が

必要だったのです

冬陽のなかで

唇を噛んでいるのは

わたしです

何故あのように

何故あのような

ただ自らを待み

不逞で不遜な 情けも知らぬ

傷付けたことも知らず

ただ己のこのみを思い

ひた走っていた夏の日々

夕陽に照らされて立つ  
木々の一本一本に問いかける  
傷は癒えたろうか  
もう血は流れていないだろうか  
その一本一本に  
頭を垂れる